イチゴにおける育苗期の緩効性肥料と生育，収量との関係

高森敬一・石田豊明（熊本県農業研究センター）

Keiiti TAKAMORI and Toyoaki ISHIDA：
Effect of Slow Release Fertilizer Dressed in Raising Seedling on Growth and Yeild of Strawberry

イチゴの低温暗黒処理による促成栽培において，育苗期の施肥の省力化を図るために緩効性肥料を用いると，処理効果にばらつきが発生し頂花房の開花株率が低下する傾向にある。

そこで育苗期の緩効性肥料が生育，収量に及ぼす影響について検討した。

1. 試験方法

試験は熊本県農業研究センター農産園芸研究所野菜部八代研究室の露地およびビニルハウスで実施した。供試品種は‘とよのか’，供試緩効性肥料として被覆燐硝安加里（ロング424）を用いた。試験区は，窒素施肥量を280mg／株とし，ロング肥料70日タイプ区（以下L70区と記す），40日タイプ区（同L40区），70日タイプと40日タイプを2 1（同2・1区）および1 1（同1 1区）に混合した4区とした。肥料は1998年6月13日に床土（赤土3，粉砕モミガラ3，炭化物3，ピートモス1）に埋設処理した。葉柄中の硝酸態窒素はRQフレックスで測定した。育苗は10 5cm黒ポリポットで金網を利用した高設育苗施設で行い，8月24日～9月5日まで短期の低温暗黒処理を行った。採苗期は6月5日，定植期は9月5日，栽植様式は畦幅110cm，株間25cm，2条植え（727株／a）とした。本ぽへの施肥はN P_2O_5・K_2O＝10 08 10（kg／a）とした。

2. 結果および考察

処理前の草丈，クラウン径には大きな差はみられなかった。処理後のクラウン径の肥大速度には差異が認められ，7月23日～8月13日の間は1 1区が早く，8月13日～8月24日の間は2.1区，L70区が早かった。展開第3葉の葉柄中の硝酸態窒素濃度は，7月7日では2 1区＞1 1区＞L40区＞L70区，7月15日では2 1区，1 1区＞L40区＞L70区，8月4日ではL70区＞1 1区，L40区＞2．1区の順であった。8月13日以降は，各区とも低い値を示した。定植後の頂花房の出蕾，開花，収穫はじめ日および第1時腋花房の出蕾，開花は，1 1区が早くL70区とL40区が遅れた。総収量，商品果収量は，1 1区および2 1区が多く，L40区が少なかった。年内収量は，1 1区が多く，L40区が少なかった。

以上の結果から，緩効性肥料の違いは，育苗期後半の草丈やクラウン径の生育では差はみられなかったが，クラウン径の成長率や定植後の頂花房の出蕾，開花，収穫はじめ日に差がみられた。

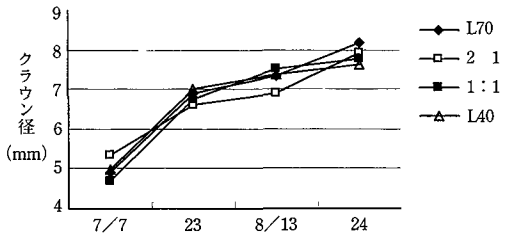
そこで，6月上旬に採苗，育苗を行い8月下旬から9月上旬に低温暗黒処理を行う促成栽培で，育苗期の6月中旬にロング肥料を施用する場合は70日タイプと40日タイプの1・1混合が適していると考えられる。

第1表 出蕾，開花および収穫始め日

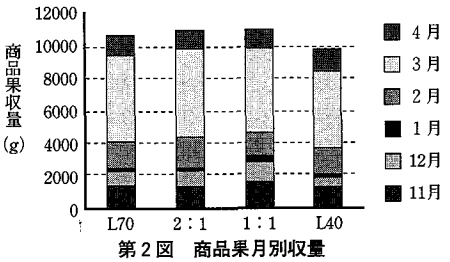
試験区	頂花房			
	出蕾日	開花日	収穫始め	開花株率[1]
	（月／日）	（月／日）	（月／日）	（%）
ロング70日	10／216	11／ 14	12／ 49	718
2：1	10／132	10／215	11／187	842
1：1	10／ 61	10／111	11／ 95	973
ロング40日	10／219	11／ 15	12／ 18	730

試験区	第1次腋花房	
	出蕾日	開花日
	（月／日）	（月／日）
ロング70日	12／241	1／119
2：1	12／182	1／ 68
1 1	12／154	1／ 50
ロング40日	12／239	1／102

注）1：最初の株が開花して2週間以内に開花した株の割合



第1図 クラウン径の推移



第2図 商品果月別収量